

エッチュウバイの資源管理に関する研究

(第2県土水産資源調査)

道根 淳

1. 研究目的

エッチュウバイ資源の持続的利用を図るため、ばいかご漁業の漁業実態を調査し、適正漁獲量、漁獲努力等の提示ならびに漁業情報の提供を行う。これにより、本資源の維持・増大とばいかご漁業経営の安定化を図る。なお、調査結果の詳細については、後述する「平成22年度の漁況」に記載した。

2. 研究方法

(1) 漁業実態調査

当センター漁獲統計システムによる漁獲統計と各漁業者に記入依頼を行っている操業野帳を解析し、本種の漁獲動向、資源状態、価格動向、漁場利用について検討を行った。

(2) 資源生態調査

JFしまね大田支所管内ならびに仁摩支所に水揚げされる漁獲物の殻高を銘柄別に測定し、銘柄別漁獲箱数から本種の殻高組成を推定した。また、村山・由木¹⁾が求めたAge-length Keyを用いて漁獲物の年齢組成を求め、さらに日別漁獲データをもとにDeLury法による資源解析を行った。

3. 研究結果

(1) 漁業実態調査

平成22年のエッチュウバイの漁獲量は73.8トン、水揚金額は2,433万円であった。また1隻当り漁獲量は14.8トンであり、水揚金額は487万円であり、漁獲量は平年並みであったが、水揚金額は平年を21%と大きく下回り、平成元年以降、平成21年、17年に次ぐ低調な水揚げであった。

利用している漁場は、日韓暫定水域の東側から日御碕沖にかけての水深190~200mであり、例年とほぼ同じ利用状況であった。

エッチュウバイの1kg当たりの価格は329円であり、平成18年以降300円台で推移している。漁業者は冷海水装置の導入など鮮度保持に取り組み、魚価上昇を目指しているが、夏場は国内各地でバイかご漁業が行われ、消費者市場では本種が供給過剰状態にあるといわれている。さらに石見地区では、高値で取引される銘柄「特大」や「小」、「豆」の漁獲量が少ないため、鮮度保持だけでは魚価上昇が見込めない状況におかれている。

(2) 資源生態調査

資源状態の指標となる1航海当たりの漁獲量は527kgであり、400kgを割り込んだ前年から回復し、平年を上回った。また、1航海当たりの漁獲個数は9,276個でやや回復したが、前年に引き続き1万個を下回っている。漁獲個数の推移を見ると、平成12年以降低い水準で横ばい傾向にあり、資源状況は依然として低水準状態が続いている。

4. 研究成果

調査で得られた結果は、島根県小型機船漁業協議会ばいかご漁業部会の資源管理指針として利用されており、これをもとに漁業者が自主的に漁獲量の上限を設定し、使用かご数の制限などの資源管理が行われている。

5. 文献

- 1) 村山達朗・由木雄一：島根県水産試験場事業報告書（平成4年度），64-69（1991）